2．一丁田台遺跡発掘調査報告書

1．調査の経過

一丁田台遺跡は、土浦市木田余字一丁田台4598－2番地に所在する。本遺跡は、調査当時日立電線土浦工場北側の道路を挟んだ一画にあり、土地所有者がトラック駐車場を造成しようとした際に発見されたものである。

土浦市教育委員会は、土地所有者の協力を得て1979年10月22日から31日までの10日間を費やして本遺跡の発掘調査を実施した。調査は、当時茨城大学人文学部非常勤講師の茂木雅博氏（東京電機大学付属高校教諭）に依頼して実施され、茂木氏の指導のもと茨城大学人文学部生が発掘調査にあたった。

発掘調査は、当時茨城大学人文学部４年生の稲村繁氏が中心となって、人文学部博物館学受講生の応援を得て実施された。※調査の経過は、茂木氏の調査記録による。以下は、稲村氏の調査日誌をもとに記録する。

10月22日（月）：遺構再確認のため表土の除去を行う。新たに竪穴住居１軒を確認し、計３軒となる。
10月23日（火）：住居跡を東から１・２・３号住居とし、プラン確認を行う。２号住居は、床面を検出。
10月24日（水）：１・３号住居を掘り始める。１号は明確な床面は検出されず。２号は床面と北東壁付近で多量の炭化材が検出された。
10月25日（木）：１号は硬い床面が検出され、北側でカマドを確認。２号はカマドと柱穴を除いてほぼ掘り下げ、カマドおよびその周辺から甕と甑が検出された。
10月26日（金）：１号は床面の精査。２号は床面と壁の検出を行い、多量の焼土および炭化物のために作業がほとんど進行しなかった。３号は床面精査とカマドの掘り出し。
10月27日（土）：各住居跡の土層図。１号は柱穴および貯蔵穴、カマドの掘り出し。２号は焼土・炭化物が多く、また土器も多量に検出された。カマドを北西壁で確認、焼土が多量に詰まっていた。
10月28日（日）：１号はカマド、２号は床面・壁の検出とカマドの掘り出し。３号はカマドを掘り上げる。
10月29日（月）：１号はカマドを掘り上げたのち、１・３号の清掃と写真撮影。
10月30日（火）：１号は実測を開始。２号は夕方になって掘り上がる。３号は実測を開始する。
10月31日（水）：１号は実測を終了し、遺物の取り上げ。２号は清掃ののち、写真撮影、実測を行い、遺物の取り上げは夕方までかかった。３号は実測終了。並行して全測図を作成し、本日で調査終了。

・**調査参加者**　※名簿は茂木雅博氏の調査記録により、当時の所属を付記した。
茂木雅博（東京電機大学付属高校教諭）、岩沢茂、日下部和宏（土浦市教育委員会社会教育課）、稲村繁、楢崎明弘、藤村達巳、川又清明（茨城大学人文学部４年）、綾野玲子、岩谷礼子、塩谷修、千葉佳奈恵、横山仁、渡部英夫（茨城大学人文学部３年）、山田八重子、渡辺裕子（茨城大学人文学部２年）、木田余地区の皆さん

・**協力者**　調査当時：小野公明、本報告刊行時：小林圭子　高梨智恵子、小屋亮太（主に実測図トレース）
※本報告に掲載した写真のうち、出土遺物は塩谷修（写真１は、伊藤絵理）、調査当時の写真は全て茂木雅博氏の撮影による。本報告の編集・執筆は塩谷（平成30年度上高津貝塚ふるさと歴史の広場再任用職員）が行った。

2．立地と周辺の遺跡

一丁田台遺跡は、その北側が中貫都市下水路と呼ばれる小河川に面する台地端に位置している。遺跡の東側には国体道路と呼称される県道が南北に走り、南側は日立電線土浦工場敷地から続く山林（現在は日立金属㈱、敷地北側の山林は木田余ショッピングモールとなっている。）で画されていた。工場敷地と遺跡との間には復員５ｍほどの道路があり、遺跡は道路と台地端の間の僅か5,000㎡ほどの

雑木林の中にあった。

周辺の遺跡は、おもに霞ヶ浦に面する台地南側に多く認められ、その他は中貫都市下水路や境川流域の台地北側の支谷沿いに点在している。国体道路を挟んで本遺跡の東南に広がる木田余東台は、1988（昭和63）年から1991（平成３）年にかけて木田余土地区画整理事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施され、台地縁辺を中心に多くの遺跡が発見されている（図１参照）。台地東南側では、南から稈買場遺跡（２）、御昊遺跡（３）、東台遺跡（４）、東台古墳群（５）、宝積遺跡（６）など、旧石器・縄文時代と古墳時代の遺跡を中心に、一部弥生時代後期の集落などが発掘されている。一方、台地北縁からは、本遺跡（１）と一連の可能性も考えられる一丁田台東遺跡（７）や、宮崎遺跡（８）、宮脇遺跡（９）など、おもに奈良・平安時代の歴史時代の遺跡が展開する様相がうかがわれる（土浦市教育委員会他『木田余台Ⅰ』1991年、『木田余台Ⅱ』2002年）。

少し広域にみても、台地北側の小支谷沿いには縄文時代の遺跡と奈良平安時代の遺跡が点在するのに対し、霞ヶ浦に面する南側の台地縁辺部には古墳時代の遺跡が極めて多い特徴が指摘できる。とくに、木田余台の東側に隣接する手野町所在の后塚古墳（10･前方後方墳）、王塚古墳（11･前方後円墳）は、古墳時代前期の大型古墳として稀少であり、古墳時代におけるこの一帯の歴史的位置とその重要性を物語っている。

図１　周辺の遺跡分布図（縮尺:約31,000分の１、国土地理院「常陸藤沢」より）及び調査区位置図（縮尺:2,500分の１）

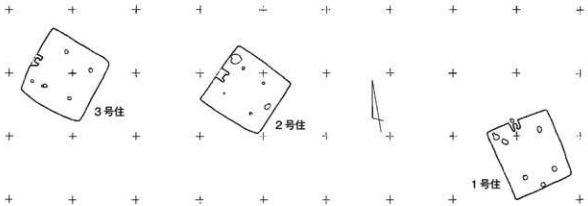


図２　遺構全体図（配置図）　縮尺：300分の１

3．遺構の概要 ※本項は稲村氏の原稿をもとに、一部茂木氏の記録を参考に記述している。

調査は既に表土が重機によって除去されており、全体にジョレンを使って精査し、3軒の住居跡の輪郭が明確であったために、土層確認のベルトを残して覆土を取り除くことにつとめた。それ以外の部分については、何等の遺構も確認することはできなかった。以下住居跡の番号順に紹介することにしたい。

1号住居跡（図3、写真5）

位置： 遺跡の東側に位置する。北側の台地端から約15m内側にある。西側約16mには2号住居跡がある。

形状・規模： 南北に長い長方形プラン。東壁5.9m、西壁5.9m、南壁5.2m、北壁5.2mを測り、東西壁、南北壁が各々同規模である。

主軸方向： N12°Wと若干西に向いている。

柱穴： P1　42×59（13×15）、深さ56cm、P2　46×51（18×29）、深さ43cm、P3　40×52（18×20）、深さ40cm、P4　46×49（15×17）、深さ56cm、P5　39×49（14×19）、深さ51cm　計5。※（）内は底面の規模。以下同じ。

貯蔵穴： カマドの西側にあり、方形に近いプランを示す。規模は、53×57（24×34）、深さ50cmを測る。

床： 床面は柱穴の内側が非常に硬いが、周囲は部分的に硬くなっている程度である。壁ぎわがわずかに高くなっている。また、わずかではあるがカマド周辺が低く、南から北に傾斜している。

壁： 南から北に傾斜している地形的制約によるものと思われるが、南壁に対して北壁は低くなっている。また、腐植土の堆積が北壁の外側にまで広がっていたことからみれば、北壁本来の高さもあまりなかったものと思われる。高さは南壁45cm、北壁10cmを測る。

カマド： 北壁の西寄りに壁を切り込んでつくられている。高さ15cm程度遺存していた。北側には煙道がのびていたらしいが、ほとんど削平されており、わずかに壁の外側に窪みとなって遺存していた。カマドの袖は粘土、ローム、砂によって構築されている。硬さに欠け、使用回数もあまり多くなかったのか、焼土がほとんど認められなかった。規模は、壁際で幅90cm、袖の長さ70cmを測る。

遺物出土状況： 破片以外はほとんど床面に密着して検出されている。P1とP2の間から土錘、P2付近で杯・甕、P3と南壁との間で杯、その西側で石器（用途不明）、そして貯蔵穴に接して杯3個体が検出された。

2号住居跡（図4、写真6・7）

位置： 遺跡のほぼ中央に位置し、北側の台地端から約10m内側につくられている。

形状： 北東壁および南西壁がわずかにふくらもみをもつ台形に近いプランで、隅丸はみられない。幅に対して主軸がわずかに長く、またカマドのある北西壁が南東壁より長い。

規模： 北東壁5.3m、南西壁5.2m、北西壁5.2m、南東壁4.9mを測る。

主軸方向： N47°Wとほぼ北西方向である。

柱穴： P1　17×18（10×10）深さ64cm、P2　18×24（16×16）深さ26cm、P3　18×21（10×10）深さ34cm、P4　16×17（12×12）深さ42cm　計4。

貯蔵穴： カマドの北東に74×98（35×47）深さ40cm、カマドの正面で南東壁寄りに36×42（24×33）深さ36cmの規模をもつ貯蔵穴が2箇所で検出された。

床： 非常に硬い床面の範囲は柱穴の内側にみられたが、外側でも部分的に認められた。また焼失家屋であるため焼土が多量に床面上に堆積しており、床面自体も熱を受けて焼土化している部分がみられた。

壁： 1・3号住居跡に比べて相対的によく残っていた。最も低い北東壁で24cm、北西壁で30cm、南東壁で42cm、最も高い南西壁で50cmを測る。

カマド： 北西壁の中央につくられており、遺存状態は極めて良好であった。ブリッジは認められなかったが、袖は極めて硬く垂直に立ち上がっていた。1・3号住居跡のカマドの袖とは異なり、粘土を焼いてそれを袖に使用しているものと思われる。したがって壁の切り込みはなく、硬い袖を壁につけてその周囲を粘土で固めているようである。焚口部は急激に深くなり、検出時点では焼土と炭化物が充満していた。周辺の床面や袖先端の火を受けた状態からみて長期間使用していたものと考えられる。規模は壁際で幅82cm・袖部で95cm、長さ81cm（東側袖）・85cm（西側袖）、焚口部幅45cm、深さ20cmを測る。

周溝： 北西壁の西側および南コーナー付近を除いて囲繞していた。幅は10～18cmで、深さは6cm以下と非常に浅かった。

遺物出土状況： 焼失家屋であることから多量の焼土と炭化材が検出された。炭化材は屋根と考えられるが、柱を思わせるほどの太いものはなく、ほとんどが垂木程度で長さも70cm遺存していたものが最長であった。また、床のほぼ全面にわたって萱のような炭化物がみられた。焼土は壁際に大きなブロックとして検出されたものが多く、これらはすべて炭化物の上面にのっていた。出土遺物としては、甕がカマド、その東側、北コーナーの3ヶ所から、杯がP1とP2の間で2、P2と南東壁の間で3、P3の東側で1、P4の東側で4、カマドの西側で2の計12個体分とそれ以上の出土があった。カマド西側袖の先端付近から須恵器の甑、そしてP4の南側約1mから土製紡錘車が出土した。また、P4に接して南側の30×30cmの範囲から炭化米がブロック状で出土した。杯20個体と甑、甕・小型甕各1個体を図化した。

3号住居跡（図5、写真8・9）

位置： 遺跡の西側に位置し、北側の台地端から約10m内側にある。東側約8mには2号住居跡がある。

形状： 西側コーナーだけが隅丸となる方形プランで、主軸長に対して幅が広い。また、2号住居跡と同様にカマドのある北西壁が南東壁より長くなっている。

規模： 北東壁5.2m、南西壁5.2m、北西壁5.5m、南東壁5.4mを測り、規模は2号住居跡とほぼ同じである。

主軸方向： N46°Wとほぼ2号住居跡と同じ北西方向である。

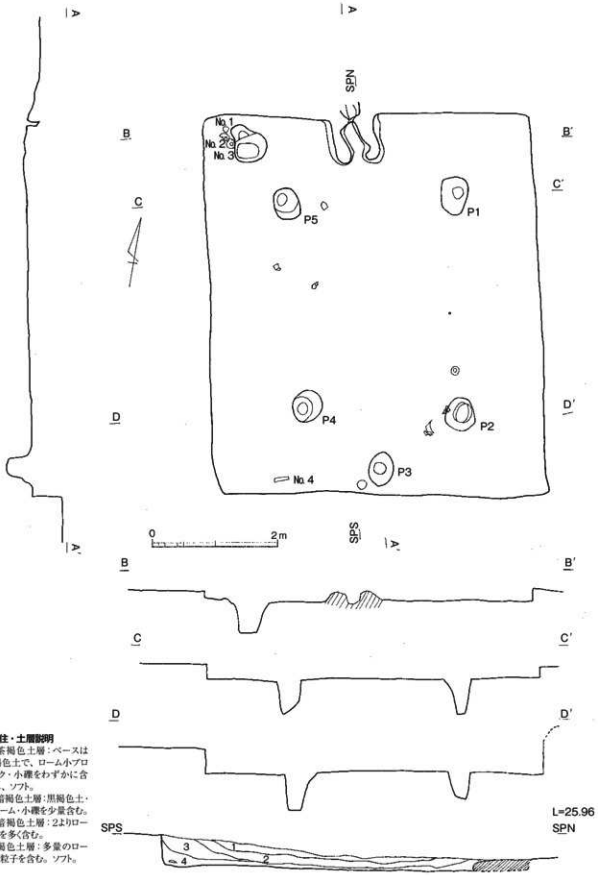
柱穴： P1　28×33（13×17）深さ52cm、P2　41×49（22×28）深さ37cm、P3　40×44（15×19）深さ56cm、P4　31×31（11×14）深さ31cm　P5　23×25（8×9）深さ25cm、P6　17×19（7×8）深さ23cm、P7　20×23（14×14）深さ34cmの計7である。P3、P4、P5の状況から、家の建て替えがおこなわれた事があるものと思われる。

床： 床面は柱穴の内側が硬いが、周囲はさほど明瞭ではない。また、自然地形の制約と思われるが、南側が高くわずかに北に向かって傾斜している。

壁： 床面同様に北側が低く、特に北コーナーでは壁がなくなっている。高さは北東壁の最高所で26cm、南西壁50cm、北西壁の最高所で35cm、南東壁50cmを測る。

カマド： 北西壁の中央に壁を切り込まずに作られている。幅は1.2mで、袖の長さは西側が65cm、東側が60cmを測る。煙道はなく両袖をつなぐブリッジがみられる。またカマドの外側は、カマドに向かって擂鉢状に掘り込まれている。袖およびブリッジは粘土・ローム・砂を混ぜ合わせてつくっている。カマドの使用期間は短かったものと思われ、ほとんど焼土が検出されなかった。

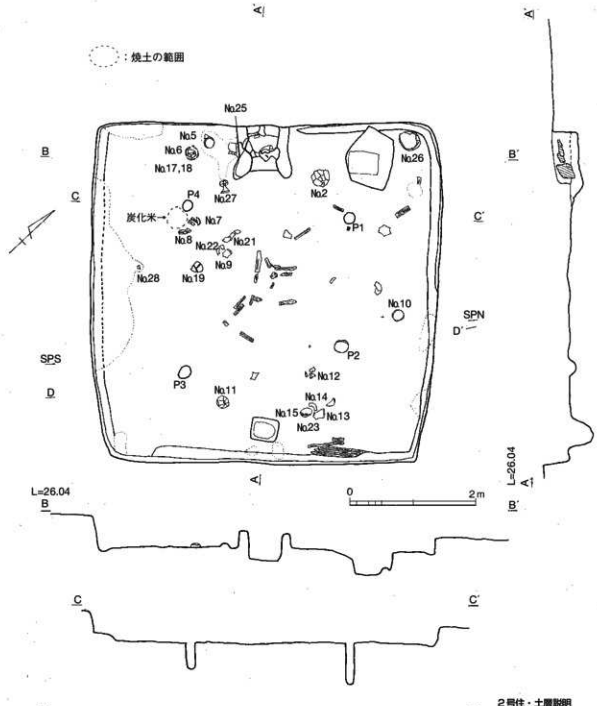
遺物出土状況： 遺物の出土は3住居跡の中で最も少なく、甕2、甑1のみであった。カマドの焚口部には床面から4cm浮いた状態で甕が、北側袖に接して床面直上に甑が土圧で潰れた状態出土した。また、P1の北からは小型の甕がほぼ完形のまま床面から3cm浮いた状態で出土した。



1号住・土層説明

1. 茶褐色土層：ベースは褐色土で、ローム小ブロック・小礫をわずかに含み、ソフト。
2. 暗褐色土層：黒褐色土・ローム・小礫を少量含む。
3. 暗褐色土層：2よりロームを多く含む。
4. 褐色土層：多量のローム粒子を含む。ソフト。

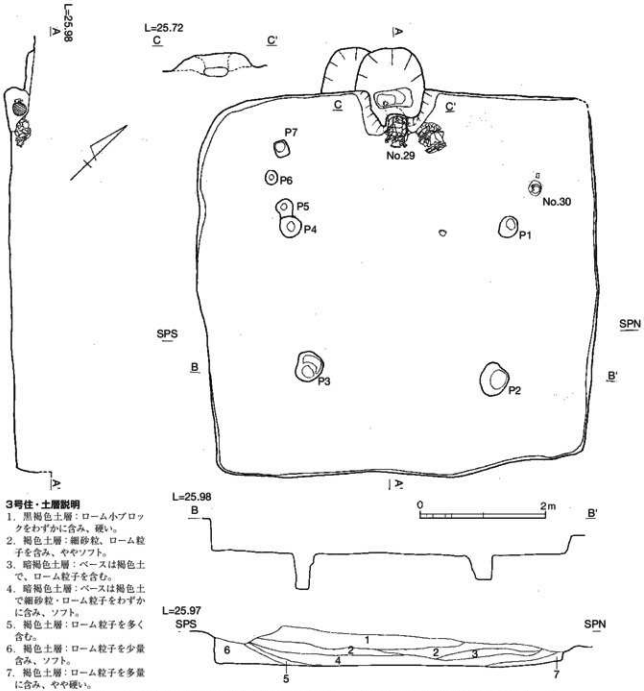
図3　1号住居跡遺構実測図　縮尺：60分の1　※平面図のNo.は遺物観察表のNo.と一致



2号住・土層説明

1. 黒褐色土層：ベースは旧表土で、ローム粒子・焼土をわずかに含み、硬い。
2. 暗褐色土層：ローム粒子・砂粒・焼土・炭化物を含む。
3. 暗褐色土層：2よりローム粒子を多く含み、硬い。
4. 褐色土層：2よりローム粒子・焼土を多く含む。
5. 暗褐色土層：細砂粒を含み、焼土・炭化物の小ブロックを少量含む。ソフト。
6. 明褐色土層：ロームがベースで焼土・炭化物を少量含む。
7. 焼土ブロック

図4　2号住居跡遺構実測図　縮尺：60分の1　※平面図のNo.は遺物観察表のNo.と一致



3号住・土層説明

1. 黒褐色土層：ローム小ブロックをわずかに含み、硬い。
2. 褐色土層：細砂粒、ローム粒子を含み、ややソフト。
3. 暗褐色土層：ベースは褐色土で、ローム粒子を含む。
4. 暗褐色土層：ベースは褐色土で細砂粒・ローム粒子をわずかに含み、ソフト。
5. 褐色土層：ローム粒子を多く含む。
6. 褐色土層：ローム粒子を少量含み、ソフト。
7. 褐色土層：ローム粒子を多量に含み、やや硬い。

図５　３号住居跡遺構実測図　縮尺：60分の１　※平面図のNo.は遺物観察表のNo.と一致

４．出土遺物

（１）土器、土製品、石器

２号住居跡が最も出土遺物が多い。土器の組成をみると、土師器の甕形土器、杯形土器と須恵器の甕があり、とくに杯形土器が多いのが特徴である。１号住居跡では杯形土器３個体と不明石器、３号住居跡ではカマド出土の甕形土器と完形の小型甕形土器を図化し報告する。

３軒の住居跡は、杯や甕などの類似性からほぼ同時期と考えられ、須恵器甕や須恵器模倣の土師器杯の特徴から６世紀後半の年代が想定される。各住居の同時共存の想定は、遺構の配置状況からも妥当なものと言えよう。

※以下に掲示する土器観察表は、川村浩司氏（茨城大学人文学部生）が作成していた原稿に基づき、塩谷が遺物を再確認し編集したものである。なお出土土器は、担当教官である茨城大学人文学部・茂木雅博氏の指導のもと、博物館学受講生が整理し、土器の実測はおもに川村氏が行った。

表1　一丁田台遺跡出土遺物観察表（A: 口径，B: 底径，C: 器高　石器は A: 長さ，B: 幅，C: 厚さ）

№	種類器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴	出土遺構	掲図図版
1	土師器 杯	A13.6 C4.6	微砂粒を含み、精選。黒色粒、雲母微粒子をまばらに含む。	淡褐色	良好	口縁はやや尖り気味で、直立する。口縁下端の稜の上面に凹線が廻る。	杯部外面はヘラ削り、口縁部は横ナデ調整。杯部内面は、ナデ調整。	1号住	図6
2	土師器 杯	A14.6 C4.1	微砂粒を含み、比較的精選。雲母微粒子をまばらに含む。	黒褐色	普通	底部は僅かに窪む丸底。口縁端部は短く直立し、内面が肥厚する。	底部外面は粗いヘラ削り、杯部はヘラナデを行う。下半に輪積痕を留める。口縁部横ナデ、杯部内面は丁寧なヘラ磨き。	1号住	図6
3	土師器 杯	A13.6 C3.0	微砂粒を含み、比較的精選。雲母微粒子をまばらに含む。	暗褐色	良好	丸底でやや厚みがあり、口縁部は尖り気味ではぼ直立する。口縁下端の稜は明瞭である。	口縁部は横ナデ、杯部上半はヘラ削りの後、横方向のヘラナデ。輪積痕あり。下半はヘラナデ。内面はナデ調整。	1号住	図6
4	不明石器	A8.1 B24.1 C4.5	片岩製	灰褐色		短冊形を呈する。	長側辺の上辺と下辺は直線的に切断し、加工されたものと思われる。	1号住	図6
5	土師器 杯	A13.8 C4.7	微砂粒を含み、精選。繊維質や黒色微粒砂、雲母微粒子をまばらに含む。	茶褐色、一部黒色を呈す	良好	丸底で口縁部は直立し、下端の稜は丸みを持っている。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は、比較的丁寧なナデ調整。	2号住	図6
6	土師器 杯	A13.4 C5.1	微砂粒を含み、比較的精選。	茶褐色、一部黒色を呈す	良好	底部は、不安定な丸底。口縁部はやや内傾し、下端の稜は丸みをもつ。	口縁部横ナデの後、外面に2条の凹線を廻らす。杯部外面はヘラ削り、内面は全面ナデ調整の後、底部付近はヘラ磨き。	2号住	図6
7	土師器 杯	A〔14.9〕 C 現存4.1	微砂粒を含み、精選。黒色粒まばら。	淡褐色、一部黒色を呈す	良好	口縁部は内湾気味に直立。下端の稜は比較的明瞭だが、波うっている。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。内面は、丁寧なナデ調整、口縁部下半にヘラ磨き。	2号住	図6
8	土師器 杯	A〔14.6〕 C 現存3.5	微砂粒を含み、精選。黒色粒まばら。	淡褐色、一部黒色を呈す	良好	口縁部は外傾し、下端の稜は明瞭である。浅めの杯部と思われる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。内面は、ナデ調整。	2号住	図6
9	土師器 杯	A〔14.2〕 C5.2	微砂粒を含み、精選。黒色粒、雲母粒をわずかに含む。	にぶい褐色、暗褐色	普通	丸底で厚みがあり、口縁部は尖り気味で直立する。口縁下端の稜は比較的明瞭である。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、丁寧なヘラナデ。内面は、やや粗いナデ調整。	2号住	図6
10	土師器 杯	A13.3 C4.6	微砂粒を含み、砂礫を僅かに、比較的精選。黒色粒、雲母微粒子まばらに含む。	口縁部及び杯部外面黒色、内面は淡褐色	良好	丸底の杯部、口縁部はやや外傾する。下端の稜は明瞭で稜上面に凹線を廻らす。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は横ナデ及び、粗いナデ調整。	2号住	図6
11	土師器 杯	A14.0 C4.7	微砂粒を含み、比較的精選。白色粒礫を僅かに、雲母微粒子をまばらに含む。	全体に黒色及び暗褐色、外面の一部が淡褐色	良好	いびつで不安定な丸底。口縁部は、内面は膨らむが直立し、下端の稜は丸みをもつ。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は口縁部と同じ丁寧な横ナデ。	2号住	図6
12	土師器 杯	A13.4 C4.2	微砂粒を含み、比較的精選。黒色粒、雲母微粒子をまばらに含む。	明褐色を呈し、口縁部と杯部内外面の一部が黒色	普通	やや浅めの杯部で、口縁部は内傾する。下端の稜は比較的明瞭。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。内面は丁寧なナデ調整。	2号住	図6
13	土師器 杯	A〔13.5〕 C 現存4.4	微砂粒を含み、精選。黒色粒、雲母微粒子をまばらに含む。	淡褐色を呈し、一部が黒色	良好	口縁部はやや外傾し、下端の稜はやや鋭い。浅めの杯部と思われる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は上半が横ナデ、下半は丁寧なナデ調整。	2号住	図6
14	土師器 杯	A〔12.5〕 C 現存4.1	微砂粒を含み、比較的精選。白色粒礫、雲母粒を僅かに含む。	暗茶褐色を呈し、口縁部が黒色	良好	口縁部はやや内傾し、尖り気味。下端の稜は鋭く、屈曲も明瞭。杯部は丸味が強く深めで、器壁も薄い。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ、上位に輪積み痕を残す。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2号住	図6
15	土師器 杯	A〔13.4〕 C4.7	微砂粒を含み、比較的精選。白色粒礫、雲母微粒子をまばらに含む。	黒色及び、杯部下半の外面は一部黒褐色を呈す	普通	口縁部は内湾し、下端の稜は上面に凹線を廻らせて比較的鋭い。杯部は浅目の丸底で、器壁は4～5mmと比較的薄い。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は丁寧な横ナデ、およびヘラナデ調整。	2号住	図6
16	土師器 杯	A13.6 C4.3	微砂粒を含み、精選。白色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	黄褐色を呈し、口縁部の一部が黒色	良好	口縁部は直立し、下端の稜は上面に浅い凹線を廻らせて比較的明瞭。杯部は浅目で、器壁は全体に厚め。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、丁寧なヘラナデ。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2号住	図6
17	土師器 杯	A14.4 C4.7	微砂粒を含み、精選。黒色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	黒色を呈し、口縁部の一部が淡褐色	良好	浅めの丸底でやや厚みがある。口縁部は短く内傾し、内面はやや膨らんでいる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2号住	図6

№	種類器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴	出土遺構	挿図図版
18	土師器 杯	A14.4 C44	微砂粒を含み、精選。黒色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	黒色を呈し、口縁部と底部の一部が淡褐色	良好	浅めの丸底で厚みがある。口縁部は短く内傾し、内面はいくぶん膨らんでいる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2 号住	図6
19	土師器 杯	A14.7 C43	微砂粒を含み、精選。雲母微粒子をまばらに含む。	外面は茶褐色および一部黒色を呈す。	普通	丸底でやや厚みがある。口縁部は短く内傾し、内面は膨らんでいる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ、上位に輪積み痕を残す。杯部内面は横ナデ。	2 号住	図6
20	土師器 杯	A14.8 C 現存3.9	微砂粒を含み、精選。雲母微粒子をまばらに含む。	黒色を呈す。	良好	口縁部は短く内傾し、内面はやや膨らんでいる。	口縁部は横ナデ、杯部外面は、ヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は丁寧なヘラ磨き。	2 号住	図6
21	土師器 杯	A14.3 C4.7	微砂粒を含み、精選。黒色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	外面は暗褐色および一部黒色を呈し、内面は淡褐色	良好	丸底で比較的厚みがある。口縁部は短く内傾し、内面には窪みがある。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2 号住	図6
22	土師器 杯	A〔15.4〕 C 現存4.3	微砂粒を含み、精選。黒色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	淡褐色を呈し、口縁部の一部が黒色	良好	浅めの丸底と思われ、口縁部は短く内傾し、尖り気味である。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ、上位に輪積み痕を残す。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2 号住	図7
23	土師器 杯	A14.8 C4.7	微砂粒を含み、精選。黒色粒をわずか、雲母微粒子をまばらに含む。	外面は茶褐色および一部黒色を呈し、内面は黒色	普通	丸底で厚みがある。口縁部は長めで内傾し、内面はいくぶん膨らんでいる。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、ヘラナデ、杯部内面は横ナデ。	2 号住	図7
24	土師器 杯	A14.9 C4.7	微砂粒を含み、精選。雲母微粒子をまばらに含む。	黒色および暗褐色を呈す。	普通	丸底で厚みがある。口縁部は長めでわずかに内傾す し、端部はやや尖り気味。	口縁部は横ナデ、杯部外面はヘラ削り後、丁寧なヘラナデ。杯部内面は丁寧なナデ調整。	2 号住	図7
25	土師器 甕	A〔16.2〕 B7.4 C19.1	砂粒および白色の小礫を多量に含み、やや粗い。雲母微粒子をまばらに含む。	主に淡褐色、一部が暗褐色を呈す。胴部下半外面に煤の付着あり。	良好	口縁部は外反して開き、端部を丸くおさめている。頸部の屈曲は内外面とも緩やか、胴部はほぼ球形で、最大径はやや上位にある。底部は、若干くぼみ気味の平底。	口縁部は横ナデ、口唇部下端に一条の凹線が廻る。胴部外面は粗いナデの後、下位を中心に右斜め下方向へのヘラ磨き。内面は、丁寧なナデ調整。底部にもヘラ磨きが施される。	2 号住	図7
26	土師器 甕	A〔24.3〕 B7.6 C〔33.8〕	砂粒および白色の小礫を多量に含み、やや粗い。雲母微粒子をまばらに含む。	淡褐色や暗褐色を呈す。	やや不良	口縁端部内面に緩やかな窪みを廻らせ、外面は比較的平坦。頸部は内外面ともに緩やかに肩張し、胴部はややなで肩で長胴気味、最大径はやや上位にある。器厚は底部でやや厚くなる他はほぼ一定しており、わずかに上げ底である。	口縁部及び頸部は横ナデ。胴部外面は粗いナデの後、下位を中心に、緩及び右斜め下方向へのヘラ磨き。内面は頸部付近に輪積み痕が確認できる他は、全体に丁寧なナデ調整が施されたようである。	2 号住	図7
27	須恵器 甕	A122 C162	微砂粒を比較的多く含むが、精選されている。白色粒をまばらに含む。	内外面とも にくすんだ灰色を呈す。	良好	口頸部が著しく発達したハソウである。頸部は細長く外反し、口縁部は直線的の外傾する。胴部は最大径を上位にもち、底部は尖り気味の丸底。胴部上半は厚く重量感があるが、底部は比較的薄い。胴部上半に直径14cmの円孔がある。	口縁部には4条の櫛描波状文を粗く不均等に廻らし、口縁端部に明瞭な凹線を施し有段口縁としている。口縁部は内外面ともに横ナデ、頸部は丁寧なナデ調整。胴部外面上位に接ヨ目、中位はヘラ削り後にナデ調整を施し、底部付近はヘラ削りのままである。	2 号住	図7
28	土製紡錘車	A4.1 B2.4 C2.2	微砂粒を含むが、比較的精選。杯類の胎土に類似。	暗褐色を呈す。	良好	上辺の長い、断面逆台形を呈す。中心の孔は、両面より穿ったもの ※重さ:40.7g	側面は横方向のナデの後、縦方向の粗いヘラナデ。上面は比較的丁寧な磨き。下面の周縁には使用時のものか細かなキズがある。	2 号住	図7
29	土師器 甕	A222 B8.2 C37.1	砂粒および白色の小礫を多量に含み、やや粗い。雲母微粒子、黒色粒子をまばらに含む。	淡褐色や暗褐色を呈す。胴部下半外面に煤の付着あり。	普通	口縁端部外面は比較的平坦、内面に小さな段がある。頸部は内外面ともに緩やかな曲線を呈し、いわゆるなで肩となっている。胴部は長く瘤彫形に類似する。底部は、僅かに上げ底になっている。	口縁部及び頸部外面は横ナデ。胴部外面はナデの後、下位を中心に、縦方向へのヘラ磨き。内面は口縁部及び頸部が内面同様に横ナデ、一部に輪積み痕が確認できる。胴部はヘラ削りの後、丁寧なナデ調整。	3 号住	図8
30	土師器 甕	A179 B7.9 C18.1	砂粒および白色の小礫を多量に含み、やや粗い。雲母微粒子、黒色粒子をまばらに含む。	淡褐色や暗褐色を呈す。胴部下半外面に煤の付着あり。	普通	口縁端部の平坦面に浅い窪みが廻る。口唇部は丸くおさめている。口縁部は比較的短く外反し、頸部内面は曲線を呈している。なで肩で、胴部最大径は中位にある。底部は平底。	口縁部は内外面ともに横ナデ。胴部外面はナデの後、下位から中位に右斜め下方向へのヘラ磨き。内面は、丁寧な板ナデ調整。底部にもヘラ磨きが施される。	3 号住	図8

縮尺：3分の1（4以外）
※4は、6分の1

図6　出土遺物実測図（1～4：1号住，5～21：2号住）　※No.は遺物観察表のNo.と一致

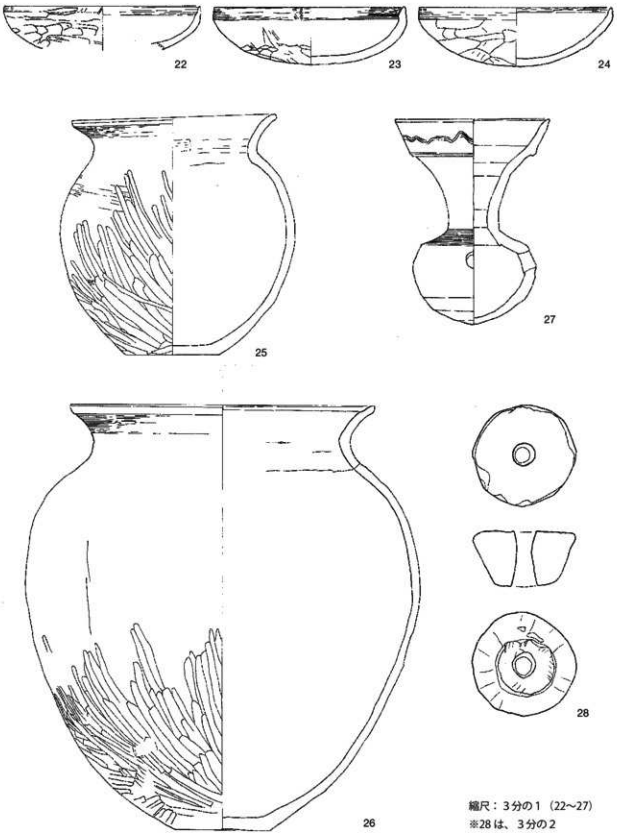


図7　出土遺物実測図（22～28：2号住）　※No.は遺物観察表のNo.と一致

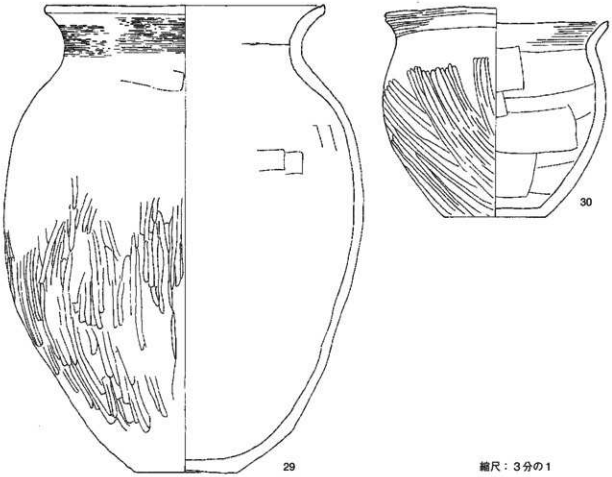


図８　出土遺物実測図（29・30：３号住）　※№は遺物観察表と一致

（２）炭化米（写真１・２）

２号住居跡の北西柱穴（Ｐ４）の南側、柱に接して30×30cmの範囲から炭化米が出土した。炭化米は住居跡の床面上から出土しており、その脇から２個体分の土師器の杯形土器が出土している。また、これら炭化米や土器と一緒に、周辺からは炭化木材も出土している。

炭化米の現状は、最大でおよそ4.5×４cmの塊が２個（写真２は、この２個体を接合した状態）の他、２～３cmの塊が５個、それ以下の塊が10数個に分離している。

炭化米を観察すると、わずかに米粒の形を残す部分がある（写真１）。粒は長さ４～５mmほど、形態は丸みを帯びた短粒で、おそらくジャポニカ種に属するものと思われる。また、炭化米塊の表面に網代痕（網代編みの圧痕）の残る部分が認められる（写真２）。網代材は、幅５mmほどで、編み方が明瞭な部分はわずかだが、２本越え・２本潜り・１本送りに編んだものかと思われる（写真２、図９参照）。

これらの炭化米の旧状は判然としないが、米粒がきわめて密着した状態で塊となっていることが特徴である。また、表面に網代編みの圧痕を残すことからも、炭化米は生米ではなく、粘質性のある調理米と考えられる。炭化米は、住居内にあった調理米が焼失したものであり、柱の脇の20～30cmの範囲で出土していることから考えて、調理された米飯が網代編みの笊状、あるいは箱状の容器につめられ、保管されていた状況が想定される。

写真１．炭化米（部分）

写真２．炭化米（網代の残る部分）
※写真の左右最大幅は、7.8cm。網代痕は左塊の右半、
及び右塊の左上部分に残る。網代材の幅は約５mm。

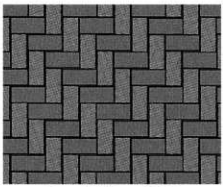


図９　網代編みの模式図
（２本越え・２本潜り・１本送り）

５．まとめ

一丁田台遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡３軒のみが発見され、発掘調査された。40年も前の調査だが、調査時の図面や写真が保管され、調査に関わった方々の調査直後の詳細な原稿が残されており大いに役立った。様々な事情から、必要最小限の事実記載のみとなったが、正確な報告ができたと思う。

３軒の竪穴住居跡は、一定の間隔をおいて、主軸方向をほぼ同じくして並んでいた。各住居の出土土器もほぼ同時期と想定され、古墳時代後期の６世紀後半に同時併存していた住居と考えられる。

２号住居跡の出土土器が最も多く、大量の土師器杯が特徴的で、須恵器甕の出土も特筆される。２号住居は焼失家屋の可能性があり、網代痕を残す炭化米などが稀少例として注目されるが、一方で大量に出土した土器群に二次焼成による被熱の痕跡がほとんど認められないことも指摘しておきたい。

写真３．調査当時の遺跡遠景（北西の谷津田より遺跡を望む）

写真４．遺跡近景（調査風景）東側より

写真５．１号住居跡全景

写真６．２号住居跡全景

写真７．２号住居カマド

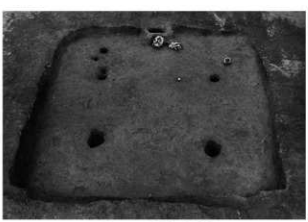


写真８．３号住居跡全景

写真９．３号住居カマド

写真10．１号住居跡出土土器（図６－２）

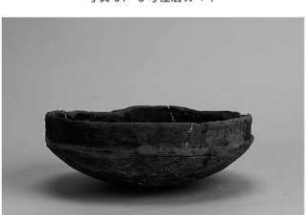


写真11．１号住居跡出土土器（図６－３）

写真12. 2号住居跡出土土器（図6－5）

写真13. 2号住居跡出土土器（図6－12）

写真14. 2号住居跡出土土器（図6－17）

写真15. 2号住居跡出土土器（図7－25）

写真16. 2号住居跡出土土器（図7－27）

写真18. 3号住居跡出土土器（図8－30）

写真17. 3号住居跡出土土器（図8－29）

報告書抄録

ふりがな	かみたかつかいづかふるさとれきしのひろばねんぽう
書名	上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報　第25号　―2018（平成30）年度―
副書名	一丁田台遺跡発掘調査報告書
編著者名	塩谷　修
編集機関	上高津貝塚ふるさと歴史の広場
所在地	〒300-0811　茨城県土浦市上高津1843　℡ 029-826-7111
発行機関	土浦市教育委員会
所在地	〒300-0036　茨城県土浦市大和町９番２号　℡ 029-826-1111（代）
発行年月日	西暦2019年（令和元年）９月27日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		経緯度		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
一丁田台遺跡（いっちょうだだい）	土浦市（つちうらし）木田余（きだより）4598-2	203	198	36°06′29″	140°12′58″	1979年10月22日～10月31日	約600㎡	駐車場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一丁田台遺跡	集落跡	古墳時代（後期）	竪穴住居３軒	土師器（甕・杯） 須恵器（甕） 土製品（紡錘車） 炭化米	古墳時代後期の集落跡。土師器の杯や甕のほか、須恵器甕や炭化米が出土。炭化米には網代痕がみられる。